人間革命

妙悟空著

東京 精文館 発行

妙悟空著

人間革命

昭和三十二年六月二十五日　印刷
昭和三十二年七月　廿五日　四十版

定価　二八〇円
地方売価三〇〇円
送料　四〇円

人間革命

著作者との了解に依り検印紙をはぶく

著者　妙悟空
發行人　北村宇之松
印刷所　東京都澁谷區田毎町九番地　明和印刷株式會社
發行所　東京都千代田區神田神保町一の三九　精文館書店
振替東京四〇三五番
電話㉙一六七五番

発芽……三
暁……七六
向上……一二〇
救い……一五七
福運……一八七
正邪……一九九
正法の力……二一二
邂逅い……二三七
巌さん活躍……二六六
混乱……三五九
前兆……三七五

嵐……三八八
飢え……四〇二
悩み……四一〇
二撃……四二二
外援……四三五
獄窓の生活……四四〇
三撃……四四六
四撃……四五三
人間革命……四五九
あとがき……戸田城聖

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間革命

―発芽―

埋火

月が冴えかえつている。

晩秋の夜の市街は、午後十一時ともなれば寝鎮つていて、凍つたような月光の降つている道路に人影はなく、野良犬でもあろうか、時々、黒い影が横切つて、軒下の闇へ消える。

終電車ではなかつたが、乗客のない電車が、小石川区指ケ谷町の停留場を車内の電燈を赫々と目立たせて発車して、車輪の音を大きく響かせて白山坂上へ登つて行つた。

それから間もなく、巌さんは古びたジャンパーの襟に顎をうずめて、指ケ谷町の裏通りにある真暗な露路を溝板を軋ませて歩いていた。

『おかえんなさい！』

巌さんが八軒長屋の一番端の家の前で足を止めて戸へ手をかけようとすると、靴音を聞いたのであろう。おつやの声が内でして、障子の開く音、土間へ下りてくる気配、立附の悪い戸がガタ

ガタ鳴つて開けられた。
『おかえんなさい。寒かつたでしよう』
『うむ……』
巌さんはなんにもいわないで玄関の上框へ腰を下し、踵の歪んだ靴をぬいで上ると、破れ障子の内へ入つて行つたが、薄暗い電燈が、煎餅布団に寝かされている一人息子の貞一を朧に照らしているのへちらと眼鏡の底の瞳を向けただけで、今晩も、おつやが少しばかりの炭火を吹き吹き寝ないで待つていた火鉢の前へ、ジャンパーを着たままで坐つた。
『今晩も、残業だつたんですか』
『うむ……』
巌さんは眼鏡を光らして首肯いたが、おつやに話そうとしない。
彼は神田の印刷工場で植字工になつて働いており、今晩も残業が午後十時まであつたのだつた。
残業を終えて工場を出ると、仲間に誘われて、屋台店で一杯ひつかけてきたのだが、それをいおうともしない。
『毎晩、残業で、大変ね』
『うむ……』
巌さんは酒が強い。
屋台店で一杯ひつかげたくらいでは、顔へ出ないが、息が酒臭い。

冬が近いというのに、質屋から受け出せないでいるから、おつやは羽織を着ていない。袷一枚の見すぼらしい姿で、彼女は火鉢を挾んで向合うと、巌さんが酒を呑んでいるのに気が付いたが、良家に育つて、どこか、心に、大らかさと女らしさとを失つていないから、それには触れない。

『食事は済んだのですか』

『ああ……』

残業の時は、工場で食事が出る。

『だけど、偶には、早く帰つて、身体を休めないといけないのじやないかしら』

おつやが火鉢の底の螢火のような炭火へ手をかざして心配そうにいうと、途端に、巌さんは口を開いたが、吐きだす言葉が烈しかつた。

『馬鹿なことをいうな！　植字工の日給では、一家の生活が漸くなんだ。残業を断つて、身体を休めたら、借金の払いようがないじやないか！』

巌さんは三十七歳の働き盛りである。

彼は大きな印刷工場主の十一番目に生れて、裕福に育ち、大学教育も受けた。

しかし、父は印刷工から叩き上げて大工場の持主になつていただけに、一見識を持つていて、巌さんを大学へ通わせながら、学校から帰ると、一職工として、夜遅くまで工場で働かせ、苦学生同様の生活をさせたのであつた。

ところが、巌さんは豪放磊落な気性を持つていて、それを苦痛だなどと思つたことはなく、一

面、細心緻密で、数理的な優れた頭脳も持つており、独立する前に、父の工場の経営に参画していた。

彼は独立すると製本工場を営み、二十七歳の時に、良家で育つたおつやと結婚して、相当な財産も作つたのであつたが、三十三歳の時に酒と遊蕩の味を覚え、それから崩れはじめて、製本工場は人手に渡し、次から次へ目論んだ事業にことごとく失敗して、世間への不義理も重ね、借財も嵩み、今は貧乏のドン底で心も荒み切つているのだつた。

『だがな。いつまでも、人に使われているものか！　おれは、そんな人間じやない！　工場で、穏順しく働きながら、機会がくるのを狙つているんだ。こんな生活から、今に脱け出して見せるよ！』

『……』

巌さんは酒臭い息を吐きながら、荒々しい声で、そういつた。

おつやは巌さんの顔を火鉢の向うに見上げていて、そつと溜息をした。

冬がくるのに、着る羽織もない、貧乏のドン底にいては、今に、今に……という、良人の言葉……惨めな生活にも挫けてしまわない、良人の心にある強さが、彼女にはたつた一ツの明るい希望の糸であつた。

けれど、近頃、柴田さんの宅で開かれる宗教座談会へ行くようになつてからは、以前のように、その言葉にだけ縋つていられなくなつているのだつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（製本工場を人手に渡すようになり、次々に、良人が事業に失敗したのは、お酒と遊蕩が原因だつたとしても……）

良人の帰りを夜遅くまで待つていて、不図、おつやは疑問を抱いて考え込み、独り心で呟くことがあつた。

（どうも、それだけとは思えない……）

あの偉い舅、真面目で元気で、働くことだけが楽しみのようだつた良人の父が、自分たちと前後して没落して、大工場を人手に渡し、失意の裡に、この世を去つて行つたのは、なぜであるか。

誰よりも血の濃い肉親こそ、苦しい時は助け合わなければならないのに、巌さんの妹で、自分とは義理の仲のお福が、兄が金を借りる時に、良人の平沼に保証人を頼み、そのために差押えの迷惑がかかつたとはいえ、平沼と一緒になつて、兄妹の縁を切るといい、それから三年にもなるのに、交渉を断つたままでいる冷酷さは、どこからくるのか。

おつやはさまざまに考え、この貧しい生活から脱けだそうとして、良人が焦慮つているのを見ると、柴田さんの宅で紹介された牧田城三郎という先生、威厳を湛えた顔がこわい、昔の武士を見るような牧田先生から懇々と教えられていることを、今迄にも、幾度か良人にいおうとしては躊躇してきたのであつたが、突然、おつやの口から、先生に教えられている言葉が飛びだした。

『あなた！　どんなに焦慮つても駄目なのよ。心を定めて、大善をしなくては……』

その瞬間、愛くるしい娘だつた昔の面影はなくなつて、窶れはてているおつやの顔にさつと血

がさし、生々と眼が輝いた。
『な、なに、大膳……』
巌さんは面喰つて、眼鏡の奥で微に酔いの浮んでいる眼をパチクリさせ、豆鉄砲を食つた鳩のような顔になつた。
『そうよ。大善よ。あたしたちのように苦しい生活をしている者も、大善をすれば、中善も、小善もいらない、必ず、苦しい生活が切り抜けられるんですつて！』
おつやは声をはずませて、いよいよ眼を生々させている。
『小膳でいいよ』
巌さんは屋台店でひつかけた酒の酔いが出てきたらしい、パチクリさせていた眼が蕩りとなつている。
『小膳で沢山だよ、小膳で……。家族は三人でも、貞一は赤ン坊だ。大膳なんているものか。こんな狭い部屋に、大きなお膳を据えたら、それこそ、寝るところも、貞一の遊ぶところもなくなるよ。いつまでも貧乏させているもんだから、せめて、お膳だけでも大きいのを……なんて思いだしたんだろ。女つて、見得ッ張りだからな、は、は、は……』
巌さんは雨漏りの跡が模様になつている天井へ顔を向けて笑いだした。
『……』
おつやは生々となつた眼を瞠つて茫となつていたが、自分のいう善を、良人がお膳と間違えて

いるのに気が付くと、興奮していた自分までがおかしくなつて吹きだした。

『ほ、ほ、ほほほ……あなた、その、お膳じやないわよ。あたしのいう善は、よいことをする善、悪人に対して、善人つていうでしよう、あの善……柴田さんところの宗教座談会で、牧田城三郎という先生が仰言つていたのよ。小さな善では、駄目。大善生活でなければ、生活の建て直しは出来ない。一家の幸福の根本は、大善生活にあるつて……』

おつやの顔から笑いが消えて行つて、顔の表情も、眼り光り、真剣さを湛えて烈しくなつている。

『……』

厳さんは唖然となつて、おつやを見ている。

結婚生活をはじめて、十年にもなるが、このようなおつやの顔を見たことがないのだ。

『今日も、柴田さんのところで座談会があつて、あたし出席したのだけれど、その牧田先生は仰言つたのよ。事業の失敗つづきで苦しんでおいでの御主人を、あなたが扶けて、幸福な日々を送ろうと思われるなら、大善生活をするしかない。それをすれば生命力が強くなり、逞しくなつて自然に、幸福な生活になる。是非とも、大善生活で、家庭革命をしなければならないつて、そう仰言つたんです！　牧田先生は、柴田さんの上においでになる先生で、恐い、厳しい顔をしていらつしやるけれど、噛んで含めるように話して下さる時は、仏さまのようなお優しい顔になるのよ。あたし嬉しくなつて、あなたと二人できつと、大善生活をしますつて、心の中で叫んだのよ！』

『……』

巌さんは度の強い眼鏡の内にある眼を向けて、不思議そうにおつやを凝視めている。

このように烈しく、このように熱心に、しかも、舌先に微塵の澱みも見せないで、滔々と喋る彼女を見たのもはじめてだつたのだ。

巌さんは残業を終えて宅へかえつてきて、長火鉢の前で、俄雨に降られたような気持がしている。

『大善……』

巌さんは呟いて、おつやの烈しい視線を交し、顔を横へ向けた。隣りの家との仕切りの板壁に、新聞紙が壁紙代りにベタベタと貼つてあるのが、はじめて見るように眼に映つた。

酒の酔いはほとんど醒めて、なにか、胸の内がむかむかしてきている。

冬に着るオバーがなく、羽織がない、惨めな姿の夫婦、毎夜のように残業をつづけても、月々返して行くことになつている借金が滞りがちの苦しい生活から、良人と共に脱け出そうとして、おつやが必死にいつた言葉を、巌さんの心は受け付けようとしていない。

男が持つている自負心に傷を付けまいためであり、人の世を生き抜いて行く先達は、男の役目だと信じている見得からも、妻に手を執らせる気にならないのでもあつたろう。

『家庭革命か』
巌さんはおつやへ顔を向けて、そう呟き、呟いた後で、わざと欠伸をして、吐き捨てるようにいつた。
『そんな柄じやない！』
とたんに、巌さんの眼へ、親しみ深い人だと思つていた柴田さんの柔和な顔が鮮やかに浮んできて、それが嫌らしい顔に見えだした。
（どうして、あんな奴と交際をはじめたのか……）
巌さんには、柴田さんが、他人の家へ入り込んで風波を起す、悪い人間のように思われてきたのだ。
それに家庭革命という言葉が、おつやの口から出たことも、気に食わない。
欧州大戦中に、ロシアに革命が起つて、皇帝をはじめ貴族、役人、軍人、大地主など支配階級が根こそぎ殺された血腥い記憶と一緒に、革命という文字や言葉に、彼は陰惨で激しいものを感じるのだ。
（大善生活などというものを、おつやの頭から消してしまわないと、家の内に諍いが起る！）
おつやが女らしく、穏順しく、優しくて、なにごとにも控目なために、家の内に和気が漂つていることが、事業に失敗してドン底生活に喘いでいる巌さんにとつては、唯一の慰めであつた。
それを家庭革命などといいだされて打壊されては堪らないと思つたから、彼が口を開こうとす

ると、その前に、おつやが改まつた口調で浴せてきた。

『柄やなんぞで、大善生活をしようというのではありません。あなたと二人で、仲よく日蓮さまを拝み、そして、不幸な人たちへ、そのことを知らせ教えてあげるのが、大善生活なんです』

『なに、日蓮……日蓮を拝むというのか！』

巌さんは驚いて大きな声を立てた。しかし、全然、予期しなかつたことではない。

柴田の家で開かれる宗教座談会といえば、坊主に繋りのあることは当然で、無意識ながら、承知はしていたのだ。そして、その瞬間、彼が俄に生々となつてきたのは、坊主を軽蔑する強い気持を持つており、日蓮という名が出たのを捉えて、おつやを迷いから醒めさせる自信が胸一杯にあつたからであつた。

『おつや！　おまえ、欺されてはいけない！　宗教などというものは、無智な者を誑して、金を捲上げる手段なんだ。仏や神が、この世にあるものか！　神殿に額づいて、御幣をいただいたり仏像を拝んだりするのは、偶像崇拝といつて、無智な野蛮人のすることなんだ。ロシアに革命が起つて、労働者の天下になると、一切の宗教を禁じてしまつたと共産党はいつてる。天理教とか、大本教とか、金光教とか、いろいろあるが、信者を集めて、金を搾つているんだ。一体、日蓮なんか拝んで、それを人に知らせたり教えたりすることが大善生活なら、日本に警察も裁判所も監獄もいらないじやないか！　おまえも、女学校を卒業しているのに、常識で考えたつてわかるはずだ。宗教なんぞ、無智につけ込み、弱味につけ込み、欲につけ込んで、人を欺しているんだ！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com